

機関番号：14501  
 研究種目：基盤研究 (C)  
 研究期間：2008 ～ 2010  
 課題番号：20520288  
 研究課題名 (和文) ロシア・アヴァンギャルドの言語革新—言語的逸脱とその美的機能  
 研究課題名 (英文) The Language Innovation of Russian Avant-garde: Linguistic Deviations and Its Aesthetic Functions  
 研究代表者  
 グレチュコ ヴァレリー (GRECKO VALERIJ)  
 神戸大学・国際文化学部・講師  
 研究者番号：50437456

## 研究成果の概要 (和文)：

アヴァンギャルド作家たちの最も本質的な特徴は、言語観を革新した点にある。彼らは言語を不変のコードとみなすのではなく、変化させることが可能な創造的表現手段とみなしたのである。そのため、標準的な言語使用からの逸脱が彼らにとって最も重要な芸術手法のひとつとなった。ロシア・アヴァンギャルドの作家たち (たとえばヴェリミル・フレブニコフ、ダニイル・ハルムス、アレクサンドル・ヴヴェデンスキー) の詩的言語の特徴を具体的に分析すると、彼らがそれぞれ異なる言語構造の一側面 (音声、形態、統語など) と重点的に取り組んでおり、そこから独自の文体を生み出していることがわかる。ここから言語学的な視点から見たアヴァンギャルドの類型を導き出すことが可能になる。さらに、それぞれの作家の作品に見られる言語的逸脱の特徴は、彼らの作品の美的・理念的側面に大きな影響を与えていると言える。

## 研究成果の概要 (英文)：

One of the most essential characteristics of the avant-garde writers was reevaluation of the concept of language. They regarded the language not as a constant code, but as a changeable means of creative expression. Logically enough, linguistic abnormalities and deviations became for them one of the most important artistic devices. The research on the concrete characteristics of style of the writers of Russian avant-garde (Velimir Khlebnikov, Daniil Kharms, Alexander Vvedensky) has shown, that each author predominantly exploits one of the aspects of linguistic structure (phonetic, morphologic, syntactic etc.). This finding makes it possible to outline a linguistically based typology of the avant-garde. The specific of the linguistic deviances found in the work of each author also has a profound impact on the aesthetic and ideological aspects of their respective works.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学 (英文学を除く)

キーワード：ロシア文学、記号論、アヴァンギャルド芸術

1. 研究開始当初の背景

| 19世紀末から20世紀初頭にかけておこっ

た芸術運動であるアヴァンギャルドが他の芸術運動と明確に異なるところは、彼らが芸術表現の変革と人々の意識改革、価値体系の解体・創造とを明確に結び付けていたこと、そして一定の部分でその目的が果たされたということにある。その結果、現代人である我々の美的感覚はアヴァンギャルド芸術運動によって形成された価値体系を土台としており、だからこそ、バウハウスや構成主義などの作品が一定のサイクルでしばしば再評価され、現代のデザインに好んで引用されるという現象が起きているのである。

しかしながら、これまでの研究では、アヴァンギャルドをその過剰な前衛性ゆえに、志半ばで全体主義の政治の流れに押しつぶされた（あるいは吸収された）ものとして捉えがちであった。それは、彼らが自らの主張を広めるために頻繁に発した一連の過激なマニフェストが、しばしば実際の作品のテーマとは乖離していたために、実際に彼らが構築した新しい価値体系よりも、彼らの表面的な発言に過度の注目が集まり、政治的枠組みの中での対立として議論されがちであったためである。一世紀の時を経た今日、政治的勝敗を離れ、作品を冷静に分析することによって、彼らの作品や論考のなかにあらわれる美的体系を改めて抽出しなおすことは、20世紀初頭の文化に対する再評価のみならず、現在の我々を規定する無意識に埋め込まれた倫理観・世界観の土台を明らかにすることになる。

本研究では特にロシア・アヴァンギャルド芸術運動（1910-30年代）を取り上げることになるが、ロシアという地域は、ヨーロッパの周縁として、これまでエピソード的にしか考察対象にならなかった。しかし、実際には画家シャガールやカンディンスキーがパリあるいはミュンヘンで活躍し、画家マレーヴィチや詩人マヤコフスキー、映画監督エイゼンシュテインなどがその作風の斬新さでもって、ヨーロッパ近代の価値形成に大きな影響を与えている。また、プラハなどの多文化都市を媒介として、ロシア・ソ連文化と欧米文化との間にはかなりの情報交換が行われており、相互影響関係が多岐にわたるものであった可能性が近年の研究から少しずつ明らかになってきている。

ロシア・アヴァンギャルドは、美術、音楽、文学、舞台芸術などの芸術諸ジャンルで展開されたが、いずれにも共通して重要になっているのが、「言語」をめぐる考察である。とりわけフォルマリズムと称される詩的言語の構造分析に注目した芸術家たち、理論家たちの仕事は20世紀を通して文化研究の基礎作りになど大きく貢献した。いわゆる記号論、構造主義など、あらゆる文化現象を言語の構造になぞらえて分析する手法は、この時期に展

開された言語構造そのものへの関心に端を発している。このような文化研究の手法は罗兰・バルトなどいわゆる西側の研究者によって体系化され、応用されてきた。しかし、文化状況が大きく変わりつつある現在、手法の限界や矛盾も指摘されている。現在の文化研究の手法の限界を明らかにするためにも、当初どのように模索され、それらの試みのなかで何が捨象されてしまったのかを明らかにすることが必要である。

## 2. 研究の目的

本研究は、特にロシア・アヴァンギャルド芸術運動を取り上げ、その諸表象（特に言語表現）について、「体系からの逸脱」に注目し、その事例を総合的に分析して、複数の作家、ひいては異なる芸術ジャンルに属する創作者たちに共通する「逸脱」の特徴および傾向を明らかにすることを目的とした。

具体的な作業としては、個別作品に見られる「逸脱」の特質を抽出し、それらの特徴がどのような傾向を持っているのかを総合的に分析したが、このようにして体系化された「逸脱」の総体をあらためて既存の言語体系と比較したとき、アヴァンギャルドの芸術家たちが見据えていた従来の表現の限界と可能性が明らかになるはずであると考えた。さらにその結果を踏まえて、芸術表現をそれぞれのジャンルが有する固有の芸術言語体系ととらえた時に、体系的な「逸脱」が言語（芸術表現）体系のどの部分を再生し、どのようにしてジャンルの横断的表現を可能にしたのかを明らかにすることを試みた。

## 3. 研究の方法

ロシア・アヴァンギャルドの作家個人々の文学作品における言語表現の「逸脱」事例を言語学的・記号論的手法に基づいて抽出・分析し、さらに彼らの言語実験を理論的および芸術史的観点から考察した。主な分析対象は、1910年代から30年代までのロシア語詩人・作家たち、特にヴェリミル・フレブニコフ、ダニイル・ハルムス、アレクサンドル・ヴヴェデンスキーである。その際、アヴァンギャルド運動の先駆者（言語学者ボードゥアン・ド・クルトネと作家アントン・チャーホフ）と後継者（ロシアおよび移住先で活動している現代ロシア作家たち）も考慮に入れた。分析の際の理論的基盤として、記号学者ユーリ・ロートマンのコミュニケーション理論を援用した。また、ジャンル横断的な事例として、カジミール・マレーヴィチの造形芸術とその芸術論についても考察した。

## 4. 研究成果

(1) ロートマンの非対称的コミュニケーション・モデルが、ロシア・アヴァンギャルド作

家たちの言語的「逸脱」を考察する際のフレームワークとして非常に有効である。

(2) ロシア・アヴァンギャルド研究においては「中心と周縁」という概念が、言語的規範からの「逸脱」を考察する上でも、芸術的規範からの「逸脱」を考察する上でも、重要な生産的な役割を果たし得る。

(3) 文化的なコンテクストから「翻訳」の問題について再考する必要がある。なぜなら、「翻訳」は一方でコピーでありながら、他方では文化の創造的「逸脱」でもあるからである。

(4) ボードゥアン・ド・クルトネはその言語学的・記号論的理論によって、言語的規範の限界近くにある現象が非常に重要な機能を持っていることを明らかにした。マージナルな領域にある言語が、その後アヴァンギャルドの芸術家たちに注目され、作品に取り入れられた。

(5) チューホフは一般にはリアリズムの作家として知られているが、彼の作品は実際にはアヴァンギャルド的な要素を多く持っている。アヴァンギャルドの作家たちはチューホフの作品の中の特定の要素を引き継いだのである。

(6) アヴァンギャルド芸術の後継者としては言語学者ニコライ・マールを上げることができる。マールは「新しい言語」を構想したが、この構想はアヴァンギャルド言語実験の延長線上にあると考えられる。マールが活動したのがスターリン時代だったため、彼の理論は政治的に解釈され、スターリンの民族政策や言語政策に利用された。

(7) アヴァンギャルドの「伝統」が現代のロシア作家たちにどのような形で受け継がれているかを考察した結果、現代の作家たちはアヴァンギャルド作家たちによる言語的実験のうち、意味論的な側面にはあまり関心を持っておらず、その代わりに統語論的・語用論的な側面から大きな影響を受けていることがわかった。特に興味深いのは、ロシア語を公用語としない国に移住した作家たちによる言語実験である。なぜならば、彼らの言語はアヴァンギャルドから影響を受けているのみならず、日常的に自分を取り巻いている外国語からも影響を受けているからである。

(8) 「ドミナンテ」という概念は、画家カジミール・マレーヴィチがその理論的な著作の中で展開している「付加的要素」という考え

方に非常に似ていることがわかった。したがって、「ドミナンテ」は必ずしも文学作品だけでなく、芸術作品一般に見られる特徴であると言える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

① Valerij Grecko: Между утопией и Realpolitik: Мapp, Сталин и вопрос о всемирном языке. In: Russian Linguistics. No. 34 (2), 2010, pp.159-172, 査読あり

② Valerij Grecko: К проблеме религиозного субтекста в произведениях Чехова. 「れにくさ」(東京大学大学院人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室編) 第2号、2010年、148-161頁、査読あり

③ ヴァレリー・グレチュコ「ドイツにおける新しいロシア移民の文化的諸相」国際シンポジウム「アイデンティティ、移住、越境」報告記録集、2010年、15-21頁、査読なし

④ Valerij Grecko: И. А. Бодуэн де Куртэнэ и проблема международного языка. In: Japanese Slavic and East European Studies. Vol. 30, 2010, pp.1-15, 査読あり

[学会発表] (計6件)

① Valerij Grecko: Теория прибавочного элемента Малевича. 国際会議 «Malevich without borders» (ベオグラード大学主催)、2010年12月3日、ベオグラード大学(セルビア)

② Valerij Grecko: Звук и значение в современной русской поэзии: сто лет после футуризма. 国際会議 „Image – Dialog – Experiment: Felder der russischen Gegenwartsdichtung“ (トリーア大学主催)、2010年3月19日、トリーア大学(ドイツ)

③ Valerij Grecko: На перекрестке лингвистики и идеологии: И. А. Бодуэн де Куртэнэ о международном вспомогательном языке. 日本ロシア文学会、2009年10月25日、筑波大学

④ Valerij Grecko: Семиотика религиозного пространства в рассказах Чехова. 国際会議 «Мифология культурного

пространства» (タルトゥ大学主催)、2009年9月12日、タルトゥ大学 (エストニア)

⑤ Valerij Grecko: Zentrum und Peripherie als Grundkategorien der Kultursemiotik.

国際コロキウム „Illusion der Grenze. Dynamik der kulturellen Prozesse zwischen Zentrum und Peripherie“ (ベルリン自由大学主催)、2009年3月2日、ベルリン自由大学 (ドイツ)

⑥ Valerij Grecko: Jurij Lotmans Modell der kommunikativen Asymmetrie: Entstehung und Implikationen.

国際会議 „Integration und Explosion. Perspektiven auf die Kultursemiotik Jurij Lotmans.“ (コンスタンツ大学主催)、2008年10月24日、コンスタンツ大学 (ドイツ)

[図書] (計3件)

① Valerij Grecko: Скандинавский след: Бродер Христиансен, доминанта и формирование концепции русского формализма. In: P. Pesonen (ed.): Европа в России, Москва: Новое литературное обозрение. 2010, pp. 299-311.

② ヴァレリー・グレチュコ 「ユートピアとリアル・ポリティクス—マール、スターリン、普遍言語の問題—」 桑野隆他 (編著) 『ロシア・中欧・バルカン世界のことばと文化』 成文堂、2010年、206-225頁

③ ダニエル・ハルムス (著) ヴァレリー・グレチュコ、増本浩子 (共訳) 『ハルムスの世界』 ヴィレッジブックス、2010年、238頁

[その他]

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

グレチュコ ヴァレリー

(GRECKO VALERIJ)

神戸大学・国際文化学部・講師

研究者番号：50437456

### (2) 研究分担者

### (3) 連携研究者